

時事新報

第千三百八十五號
明治十九年九月二十日 星期一
舊曆丙戌八月廿三日 癸酉
今日発行部数四十七分
月発行部数二千四百六十二分
請購部数九百八十八分
電話一千八百八十六番

時事新報定價

一紙金三錢
一月金銀六錢五分
三個月金銀一圓
半年金銀一圓六錢
一年金銀三圓
三月金銀一圓二錢
半年金銀一圓七錢
一年金銀二圓二錢
本報發行所 東京市本町二丁目

時事新報

信侶を小學教員に用ゐる事

日本國の佛法は文明開化の進歩と共に廢滅に歸す可き
或は然らば進んで能く開化の風潮に伴ひ以て舊時の勢
力を維持す可きとは識者の常に注目せる所の問題な
れども其存滅論は姑く擱き今日の實際を見るは明治十
六年全國の

寺院 七萬二千零十六

教導職(神道を除く) 七萬三千七百九十四

住職 五萬六千八百零三

少僧尼は兼任の故ならん

宗學生徒 二萬三千五百五十二

とあり故に教導職と生徒と合計すれば九萬七千三百四
十六名即ち全國僧侶の總數にして此數の内より寺に住
職たる者五萬六千八百零三名ありと知るべし今この教導
職の職務を尋るに普通の説教又は佛門生徒の教授等
從事する者もあらずと雖も其人員中の少數に過ぎ
ず又寺の住職なれば葬式的事、檀家の年忌法事に讀經
の事ある可しと雖も左まで忙しは死動にあらずし
て其生計は如何と云ふに近年寺院も次第に疲弊を以
て向ふ知なる様子なれども尙檀家信者の寄附に依り
又は寺々に附屬する田圃の利益を以て飢へず寒へず其
衣食の備は全國民を平均して中等以上有る者ならん
飲食に不自由多くして其職務は閑散あり是に於て我輩
の工廠する所は此僧侶を文明學に教育して小學教員
のらめんと欲するの一策なり明治十六年の報告も全
國小學校の數三萬五千六百五十六之に從事する教員九萬一千
六百三十六名とあり然るも今回尋常師範學校の改正に
際して是を其教師を生ず可しと雖も前議の紙上に陳
べたる如く師範校に於て教育法の善美あるにも拘はらず
其畢業生が小學校の教員となるに及で月給僅に十二圓
内地亦有可しとの見込あれば人間世界の實際を於て逆
も斯る薄給を以て上等の人品は望む可らず蓋し十二圓
金として今幸々世の中に得易き金にあらざらずと雖も
も尙も學者教師の地位に居り願望信愛の德業を備へて
兼て其威儀の重々しからんとを所望せらるる者が十餘
圓の月給として唯この月給よりの依頼して衣食せると
い何分も其身分を對不釣合ふして逆も所望も副ふ
こと能はざる場合も多るべし故に今全國寺門の固有
の衣食は手敏あるこそ幸なれ其僧侶の中より師範學校

官報

●流行地虎列刺
九月十六日 新患 十八人 新患死亡 十人
京都府丹波國 同 百十八人
大阪府 同 七十八人
内四國西成郡二新患五十三人新患死亡二十八人

の學齡に適する者を取りて規則の如く之を教育し卒業
の上は寺の住職兼小學校教員たらしめんは學校の給
料は假令十圓にても或は其以下にても既に有る生計の
外に所得のものなきは其氣分自から寛やかにして鄙劣
の沙汰も少なる可し又僧侶あれば是まで其教育の趣
向を異せざるも文事は元々其本色を以て之に文明の
教を授るとは方向を改て之に進歩するも亦遲鈍を
らざる可き又住職は必ず寺に住居して其寺の位置を見
るも全國到處、人家のれば寺ありざるの亦大小七
萬の寺は正しく日本國中、人家の多少疎密に從て配置
し一村に二寺ありれば二小村に一寺ある等數百年
來の便利上より自然なり立ち立らざれば日本の郡
村の寺々之正に小學校のあり可き位置を占めたるもの
と云ふも可なり故に住職が小學校に奉職せざるも必ず遠
隔の地に往來するを要せず或は村に事情次第にて直
に寺の建物と小學校を用るも一層便利ある可し
以上を考ふる所は便利果して便利に於て實際妨
なるとするときは各地の學事と關係する長者は寺門の勤
めて其宗學生徒の優美ある者や尋常師範學校に入學せ
しむるを得策ある可し或は佛門の本山又は教會と師範
學校と協議し尋常の師範學生徒は授業費并に衣食費迄
も學校より支辨する法あれども僧侶の入學する者は本
山教會より其費の幾分を辨支其報として本人卒業の上
は其本山教會の指定する所の寺に住職して其地の小學
校を奉職せしむるなどの約束も双方の便利ある可き
右の如くなれば日本國の學事に於ては經濟の困難を免
かれて小學校は月給の割合よりも好ま教員を得べき
佛門の方にては小學校場に佛法を説かずと雖も自然
に民間の空氣を佛法をらしむるの利益あるべし佛者は
満足して學事の經濟に乏しく、我輩は宗門に縁薄
く其利害に關係すること少くはと雖も國の經濟の
一方より見て之を得策なりと云はざるを得ず但しこゝ
に一つの困難は日本の士君子は存外慮慮深くて外
國の事を其だに及ぶ故に今回の新策便利は便利なきと
も斯くては獨り内國の佛法を最重とせしが如く見へて外
國の耶蘇教も於て何と之を思ふ可きや或は不快の念を
抱くともあらん左りと又因る杯とて外を憚るの一念
以て内の便利を顧みざるの掛念なきあらざると雖も
是を掛念するに足らざるの掛念あり本來此策は單
に經濟上より起りしことに其精神は全く宗門の利害
に關するものにあらざり故に内國の佛法が之に由て偶
然不利する所もあらば其利益を外國に耶蘇教も拒むの理
あり耶蘇教の内外徒弟をして師範學校に入學せしめん
とからば佛者と同様に易く之を許して其欲する所に任
せることを穩便の沙汰なる可し今日にも佛法と耶蘇教
とは常に競争するが故に其競争のまゝに差違を優勝劣
敗の結果を見るは多年の後ある可しと雖も是れは我
輩の關する所にはらず唯我輩は目下國の經濟の利害に
忙はしとして案を立てたる者あり

- 神奈川縣 同 三十五人
- 兵庫縣 同 二十五人
- 兵庫縣 同 二十五人
- 内務省 同 二十五人
- 新潟縣 同 二十五人
- 山梨縣 同 二十五人
- 石川縣 同 二十五人
- 福井縣 同 二十五人
- 岐阜縣 同 二十五人
- 愛知縣 同 二十五人
- 小計新患六百八十九人新患死亡四百七十八人
- 内務省 同 九百一十人
- 九月十五日 同 九百一十人
- 山梨縣 同 二十五人
- 長野縣 同 二十五人
- 青森縣 同 二十五人
- 山形縣 同 二十五人
- 福島縣 同 二十五人
- 茨城縣 同 二十五人
- 栃木縣 同 二十五人
- 群馬縣 同 二十五人
- 新患一千七百七十八人 新患死亡七百七十八人
- 合計 同 九百一十人

●大坂通信 (九月十日發) 愛媛縣高松の妻我久藏氏が
大坂鐵工所へ百五十噸積の汽船愛媛丸を注文し目下同
所にて造船中であるが同船は本月三十日迄に落成する都
合にて同氏は大坂商船會社に反對する山口縣の共榮社
と同盟して専ら關西の航海を試みる目的なりと云々
大坂商船會社の關西地方の支店は馬關、博多、長崎、
本、百貫港、筑後若津、福岡、廣島、岡山、神戸、鹿児島沖
本、那覇の各地又出張所は三津、濱、三田尻、の二ヶ所
にて其他代理店五十一ヶ所所するが今度大坂の本店に内
外賣の接待所を建築するに付右支店出張所代理店へ
照會して關西のあらゆる奇石奇木を取寄せ庭前に大
なる築山を設ける由あり○土佐産の大形和唐紙は是迄年々
支那地方へ輸出高揚を呈し現今は二百枚に付一圓五十
錢位の價格があるが今度大阪本町の門田利助が發起して
北區森町へ製紙場を創設し盛名右の和唐紙を製造して
清國へ輸出する見込みありと○前報に報せし如く大阪
東區本町三丁目の東亞貿易商社にて清國北部地方へ支
店を置く事に付同社の沼田正宣氏が来る廿一日當地出
發して天津に赴く等ありしが過日支那商視察を命ぜ
られし商務局長高橋新吉氏も本月下旬東京出發清國へ
赴くに付沼田氏は同氏を神戸まで待合せ共に清國へ赴
く事にあじたりといふ

○其二 (九月十一日發) 昨年洪水の爲先流失せし天津
天神木津川大江渡邊の五橋は今度總て鉄橋に架け換ゆ
る等も付右鉄材は大坂藤田組にて外國より買入る、爲
先同組の藤田虎太郎氏が已に洋行する迄に決したる趣
なりと云々同氏は都合に依り洋行を見合せも同店の藤
原政氏が右材料買入の爲め明後十三日神戸より英船に
乗込歐洲へ向け出發する由依り右の五大鐵橋は本年
中に橋蓋と築き来る明治廿一年中に悉皆架換つと爲
すべき目見があるといふ○本日は二十日(日)の厄日ある
を以て大坂府測候所にては昨日來觀測に怠らざりしが
既に電報を以て報達せし如く昨日午前十時の觀測にて
は暴風なるべき豫測ありし午後夜に至りて漸く暴風の

ちる觀測の
暴風ありし
農家の悦び
り○大坂鐵
外出遊歩
れば去五日
れたりし
曜日より
●秋田通信
道會は本日
り右は目下
未だ全く
て農商務省
せまが其餘
昨十八年中
種類を聞
状を受けか
名、金額案
受たる者四
なりと○堂
菊の丁へ新
生糸相續け
り精や操け
せりと高貴
居せしと
り○當地
流行地と
律なれども
新患者あり
○天然セ
無用視され
て多き中
珍しきと見
積立て其石
接せめ其
て其上を
へたると同
扱て右のセ
る所の品を
めめかか
の原料は之
またるを
自然も溶解
積少技長は
職お供する
もの昨今積
ありと云々
河國、長崎
々等して就
其上層を
ントは此地
即伊豫の小
漆喰の
と以て始と
も多き由か
の廣く堆積
て石灰を混
固めに使用